

移川子之蔵(16期)、再び。 そして私の人類学

柳沼亮寿

(九十期)

「うつしかわねのぞう」。

私にとっては特別な響きがある名前だ。そしてここに掲載した移川の写真が、何とも彼の人が柄が表れているようで、大いに気に入っている。

移川子之蔵とは、明治37年に安積中学校を卒業し、大正6年、ハーバード大学大学院でドクトル・オブ・フィロソフィーの学位を得、帰国後は台北帝国大学で活躍した戦前の(文化)人類学者である。また、私にとっては学生時代に専攻した学問においても大先輩なのだ。

私は、大学生時代、当時はまだ新しい(文化)人類学という学問に出会い、大学院で北方文化研究、なかでも恩師の研究対象のひとつであった、エスキモー社会



移川子之蔵

の文化人類学的研究を志したのだった。しかし、恩師の急逝の後、結局、研究の道には進まなかった、

というより、進めなかったというほうが正しいかもしれない。「うつしかわねのぞう」に出合ったのは、この頃だったかと思う。私は直接の面識はなかったのだが、移川の高弟で当時有名な人類学者であった馬淵東一(まぶち とういち)の著作集を神田の古本屋で手に入れた時だった。「追悼 移川子之蔵博士」の本文の後に「移川先生略歴」があり、以下のような記載が目にとまった。

原籍 福島県安達郡二本松町字根崎2-1-9

明治37年3月 福島県立安積中学校卒業

まずは安積の大先輩に人類学者がいることに驚いたのはいうまでもないが、その時はさほど母校の関係者に紹介しようなどという気はおきなかった。しかしその後、1989年、恩師が掲載されている『文化人類学群像―日本編―』という本を読んでいるときだった。民族学・考古学者の国分直一により、「南方民族文化研究のパイオニア」として移川の経歴と学問について詳細に紹介されていた。それは、とりわけ印象的な文章で始まっていた。

「移川子之蔵―その名を思い浮かべるだけで、この著名な民族学者―その研究領域の広さからいえば、人類学者と呼ぶほうが適切であるかも

しれない―の飄々たる風格がなつかしく思い出される。東北弁の訛りの残るその声まで耳底によみがえってくるように思われる。」

私は、この時はじめて、母校のOB会誌などに是非とも移川を紹介せねば、と思ったのであるが、研究の道に進まなかったこともあり、実現せずに時間だけが経過してしまっていた。

最近、私は漸く、彼を紹介する文をOB会誌に掲載してもらおうと考えるようになった。そして、たまたま東京桑野会のご好意により、去る2月の末、WebSiteに掲載していただくことができた(東京桑野会会員ブログメッセージ集)。ところが、掲載後、同期の友人から、OB会誌・桑野会報の最新号とともに以前の号の写しが送られてきた。何と、既に元安積歴史博物館長の故仲村哲郎先生(66期)が、桑野会報第38号(平成19年9月8日)に移川を紹介する文章を寄稿されていたのだった。また、仲村先生が書かれたのかどうかはわからないが、同年に安積歴史博物館報第34号(平成19年4月1日)にも紹介されていることがわかった(ただ、残念なことに後者には誤字、誤句が多い)。

本稿のタイトルに「再び」と書いたのは、このようないきさつがあつてのことである。

ところで、いつのことだったか定かではないが、90期の同期会の折、私は仲村先生に「安高出身で、移川子之蔵という人類学者をご存知ですか?」と尋ねたことがある。その時、先生は「知っているよ」とたんたんとおっしゃったのだが、それ以上、詳しい話をした記憶はない。桑野学会報第38号で仲村先生は次のように書いておられる。

「移川子之蔵博士について、2006年の末に、吉成健児氏（安積64期卒）から紹介がありました。安積高校卒業である移川博士について、紹介してみてもどうかということだったと思います。吉成氏は、07年1月に急逝され、私の手元にお預かりした「文化人類学群像・日本編」の中の移川子之蔵の紹介と「追悼 移川子之蔵博士」（馬淵東一）その他資料が残されました。この資料にもとづき、吉成氏その他からの遺志にそいかねると思いつき、紹介させていたいただきます」。

吉成氏がどのような先輩で、何故、移川をご存知であったのかはもはや知る由もないが、仲村先生が同期会の時に詳しい話をされなかったことを考えると、吉成氏から紹介を受け寄稿されたのは、同期会の後のことではなかったろうか。因みに仲村先生も印象深く感じられたので

あろう。あの国分直一の流れるような冒頭の美文を引用されている。

ともあれ、吉成氏が仲村先生に託された二編、及び愛弟子の民族学者・宮本延人による「移川教授の事ども」（私はやつとの思いで高輪の東海大学図書館に辿りつき、入手した）があったからこそ、我々安積の後輩は移川の人と業績について知ることができるのである。

一方、このような偉大な人類学者を先輩にもちながら、私はというと、研究の道を断念して国際協力、ODAの道に進み、現在に至っている。

ところが、昨年、北方文化研究者のひとりであった一緒にアラスカに出かけたことがある先生の著書を読んだことがきっかけであった。急に昔の北方関係の本を読んでみたくなり、郡山の実家に保管してあった本を取り寄せた。そして、読んでいるうちにそれだけでは物足りなく思えてきて、急に北方文化研究を自分なりに進めたいという気持ちになってきたのである。子育ても終わり、定年退職を控え、第二の人生をどのように生きるかという現実的な岐路を目前にしていたことも大きな要因ではあろう。そして、昔、遣り残したことを何らかの形で継続できないものかと考えたことも自然な成り行きであったのかもしれない。例の移川が、ハーバー

ド大学に提出した博士論文を、終生推敲を重ねていたというエピソードも動機になっているような気がする。また馬淵東一によれば、移川は、環太平洋諸地域の文化接触、交流の問題に最も関心があったようで、南海諸島や東南アジアばかりでなく、北東アジアからアラスカ方面、南米西岸などの資料も絶えず扱っていたと言う。このことは、かの現代人類学者・中沢新一が、後期旧石器時代の人々がその精神世界（「神話的思考」）を維持しながら環太平洋地域に拡散して行ったのではないかと推論していることと相通じるものがあるように思えてならないのである。

私はこの春、勉強の環境を整えようとかつて在籍していた大学院に通い始めた。私の人類学は、かなりのブランクがあるうえ再開して間もない。そして些細なものだ。それは、移川の足元にも及ぶものではないが、移川の「学問を楽しむ」（馬淵）境地にあやかりつつ自分の能力の範囲で地道に継続してゆければ本望だと思っている。

（移川の学問と人となりについては、東京桑野会のホームページ・会員ブログ2018年2月24日「偉大なる人類学者―移川子之蔵（16期）」の「こと」をご参照ください。）